

## 恵迪寮での発掘から発見された木杭列とサケ漁撈

昭和56年から57年にかけて、北海道大学の札幌キャンパス北西部では、恵迪寮の建設に先だってサクシュコトニ川遺跡（K39遺跡恵迪寮地点）の発掘調査がおこなわれました。遺跡は、北大植物園内の湧水地を水源とするセロンベツ川と、偕楽園内の湧水地を水源とするサクシュコトニ川との合流地点にあります。

この発掘では、いくつもの貴重な資料の発見がありました。特筆すべきは、セロンベツ川の川底から、数十本の木杭が列をなして発見されたことです。割材の先端を鉄製の刃物で尖らせた木杭は、河畔林であるトネリコ属（ヤチダモと推定される）の樹木を材料としていたものです。木杭に横木をわたした構造の木杭列は、長さが約12mにもおよんでいました。



このような木杭列は、形態や設置位置、規模からみて、筭や罟と呼ばれる定置漁具と考えられます。遡上してくるサケ科の魚を効率的に捕獲するために、川の流れをさえぎるように木杭列が打ち込まれたものと推定されます。こうした定置漁具が本格的に発掘調査されたのは、全国的にみても初めてのことだったため、この発見は多くの話題を呼びました。

定置漁具と考えられるこうした木杭列は、その後、北大キャンパス内のいくつかの地点で発見されています。平成14年のサクシュコトニ川の再生事業に伴う調査では、中央図書館の付近を流れていたサクシュコトニ川の川底から木杭列が発見されました。また、平成8～11年、北大キャンパス内を通る環状通エルムトンネルの建設に先立って実施された発掘調査においても、サクシュコトニ川の川底から木杭列が出土しました。

サクシュコトニ川やセロンベツ川の上流部には、かつてサケの産卵場があったことが、文献史料から知られています。河川のいくつかの地点で発見された定置漁具は、そうした産卵場へ遡上するサケを捕獲するために設けられた施設なのでしょう。両河川の流域に擦文文化の集落址が多く残されているのは、こうした定置漁具を利用するサケ漁撈と深い関係があったと考えられるのです。

### 恵迪寮地点から出土した木杭列

セロンベツ川の川底から、川を横切る方向に木杭列が出土した。河川でサケ科の魚を効率的に捕獲しようとした定置漁具と考えられる。北大構内ではじめて本格的に調査された。写真は調査中の状況を記録したもの。

(埋蔵文化財調査室)